

流路を変えた 荒川改修の“祖”たち

流路を変えるために尽力した荒川改修の“祖”ともいえる3人を紹介します。いまの荒川があるのはこの3人あってこそ！

伊奈忠治

いな ただはる
1592~1653年

初代関東郡代・伊奈忠次の次男。父、早くに亡くなった兄・忠政の跡を継いで関東郡代となり、武蔵国赤山（現川口市）に陣屋を構え、関東各地の治水工事や河川改修、新田開発に携わりました。利根川東遷、荒川西遷を実現させたのも忠治で、ほかに吉見領田堤、見沼溜井八丁堤、鬼怒川・小貝川分流、新綾瀬川開削、江戸川開削など、その業績はたくさんあります。



鴻巣市の勝願寺にある伊奈忠次・忠治の墓

関八州の発展を導いた伊奈忠次・忠治親子の墓は、鴻巣市の勝願寺（鴻巣駅より徒歩8分）境内にあり、埼玉県の史跡に指定されています。

青山士

あおやま あきら
1878~1963年

荒川放水路と岩淵水門の建設を指揮した土木技術者。1904（明治37）年から日本人でただ一人、パナマ運河建設に携わり、帰国後、荒川放水路工事に従事しました。荒川放水路の完成記念碑には青山士の名前はなく、「此ノ工事ノ完成ニアタリ多大ナル犠牲ト労役トヲ弘ヒタル我等ノ仲間ヲ記憶センカ為ニ」と記し、工事に参加したすべての人の労に感謝したそうです。



作業員にも親しまれ、望の厚かった青山士

荒川知水資料館（P13参照）2階青山士コーナーでアモア開館10周年記念企画展「パナマ運河と青山士」を開催中です。ぜひご覧ください。

斎藤祐美

さいとう ゆうび
1866~1943年

荒川の治水翁と呼ばれる政治家で、荒川沿いの馬宮村（現さいたま市西区飯田新田）生まれ。医師の家系にあって、1890（明治23）年の洪水を経験したことで治水の大切さを訴えるために、政治家になったそうです。

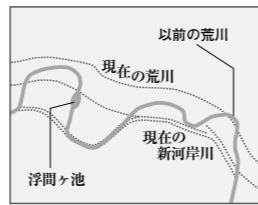


斎藤祐美研究会編集の書籍（埼玉新聞社発行）

祐美は埼玉県議として国へ荒川改修の必要性を訴え続け、荒川放水路工事の第一期に続く第二期工事として荒川上流の改修工事が実現。特に入間川の合流点付近から岩淵水門までの水路付替工事に尽力し、その功績をたたえて、さいたま市の荒川に架かる橋が「治水橋」と名付けられました。



かつて荒川だった浮間ヶ池。浮間公園の中心的存在として地域の人に親しまれています。12月上旬は紅葉もきれいです。



以前の荒川、現在の荒川、現在の新河岸川、浮間ヶ池

ふしぎ 五 浮間ヶ池は荒川だった？

埼京線の浮間舟渡駅前に広がる都立浮間公園の中心に浮間ヶ池があります。この池、釣りを楽しまる人でもいつにもぎわっています。実は荒川の流れの跡を利用した池なのです。ふしぎ四、六とも関連しますが、大正から昭和にかけて蛇行していた荒川の流れが直線化され、取り残された部分なのです。

ふしぎ 六 河川改修が生んだ飛び地のいま

放水路の開削や直線化工事により、荒川の両岸にはたくさんの飛び地ができました。今回は下流部の飛び地について紹介します。江北橋の上流右岸河川敷には一部だけ北区の飛び地があります。ここは「天狗の鼻」とも呼ばれる隅田川が蛇行していたところ。「鼻」の先端部に放水路のルートが計画されたため、隅田川はショートカットされ、その結果、天狗自慢の「鼻」が短くなったわけです。区境は以前のまま変更されてないため、飛び地になりました。その約2キロ上流では川口市が荒川の右岸まで飛び出しています。これは以前の芝川と隅田川の流路が市区境になっていることから発生。その少し上流には左岸に北区が、新荒川大橋付近の右岸には川口市がはみ出しています。一方、相互が話し合っ境を変更した地域もあります。北区浮間はかつて横曽根村

（現川口市）の村域でした。それはいまも川口市に浮間ゴルフ場があることからわかります。荒川の直線化で飛び地になったことから、1926（大正15）年に東京府北豊島郡岩淵町に編入されました。また、板橋区舟渡4丁目の大半はかつての戸田町（現戸田市）でした。葬祭場の名前に戸田の名残を知ることができます。荒川の新しい水路をまたいで入り組んでいた境界線を1950（昭和25）年に変更したことを記念して始まったのが、現在のいたばし花火大会と戸田橋花火大会なのです。



ふしぎ 七 荒川？ 隅田川？ 大川？

隅田川が荒川だったことはご存じの通りですが、その前は入間川であり、また下流部は利根川、荒川でもありました。では呼び方はどのように変わってきたのでしょうか？古くは住田川、宮戸川などと呼ばれ、江戸時代に入ってから、吾妻橋より下流は大川や浅草川、現在の隅田水門付近までは隅田川、その上流は荒川と呼ばれていたようです。放水路開削後もしばらく荒川と呼ばれていましたが、1964（昭和39）年の河川法制定によって放水路が正式に「荒川」となり、岩淵水門から下流はそれまでの通称「隅田川」が正式名となったのです。ちなみに、荒川から名前をつけた「荒川区」は放水路完成後の1932（昭和7）年に誕生しています。

流路変遷にまつわる 荒川せふしぎ

荒川の歴史を調べていくと、興味深い話題がたくさん出てきました。そのなかからフツを編集部が独断で選び、「荒川せふしぎ」として紹介します。

ふしぎ 一 荒川と元荒川の近くで遠い関係

4ページで紹介したように、かつての荒川は、現在の元荒筋を流れていました。瀬替えをした熊谷市久下付近の荒川堤防に立つと、荒川土手のすぐ隣にかつての荒川本流である元荒川の流れが見えます。川幅5メートルほどの小さな川で、荒川堤防との距離がわずか5メートル程度のところも。本流と切り離されてからずっと、すぐ横を流れてきたのです。

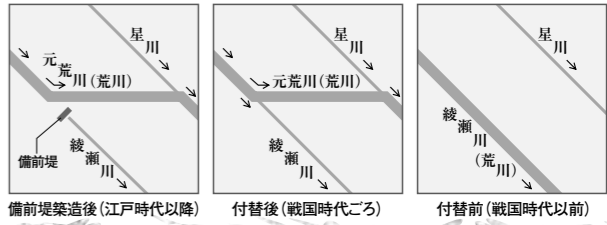


熊谷市久下と鴻巣市（旧吹上町）北新宿の境界付近。荒川土手のすぐ隣を元荒川が流れています

しかし、これだけ荒川から近いところを流れている元荒川ですが、現在は中川の支流であり、利根川水系の河川。この堤防が荒川流域と利根川流域の境になっているわけです。なお、瀬替え後の元荒川の水源は湧水でしたが、現在は熊谷市マサシトミヨ保護センター（旧水産試験場）のポンプでくみ上げた地下水。源流部には絶滅危惧種で埼玉県天然記念物に指定されている魚「ムサシトミヨ」が生息していることでも知られています。

ふしぎ 三 荒川の本流は綾瀬川だった？

元荒川が荒川の本流だったと紹介しましたが、正確には綾瀬川が本流の本流だったといつた方が正しいかもしれません。現在の綾瀬川の起点は桶川市小針領家ですが、備前堤築造（4ページ参照）により締め切られる前は、荒川の流れは元荒川と綾瀬川に分流して流れていたそうです。と考えると元荒川も綾瀬川も荒川の本流だったといえるでしょう。しかし、それよりも昔の戦国時代ごろに綾瀬川の瀬替えが行われたといわれ、綾瀬川（現在の元荒川上流部）から、東に並行する星川（現在の元荒川）へつなぐ水路が造られ、荒川が分断されたのです。そしてさらに備前堤の完成によって荒川とのつながりを断ち切られたわけです。綾瀬川が荒川の本流だったことは、綾瀬川が旧埼玉郡（左岸）と旧足立郡（右岸）の境になっていたこと（一部区間を除く）や、氷川神社と久伊豆神社の分布が、綾瀬川を境に分かれていたことなどからも想像できます。それだけの大河だったといえるでしょう。



備前堤築造後（江戸時代以降）、付替後（戦国時代ごろ）、付替前（戦国時代以前）

ふしぎ 四 新河岸川の合流点は？

現在、新河岸川は岩淵水門の下流で隅田川につながっていますが、大正より前はるか上流で荒川と合流してました。その場所は現在の朝霞水門付近。荒川からの逆流による浸水被害を防ぐために、荒川の直線化にあわせて、新河岸川の新水路が造られることになりました。新水路は蛇行していた荒川を部分的に生かして直線的に掘られ、いまのようになりました。



ふしぎ 三 寸断された綾瀬川・中川の運命

荒川放水路の開削によって、綾瀬川と中川の運命は大きく変わりました。流れが寸断されてしまったのです。それまで綾瀬川は堀切で隅田川（かつての荒川）に流れ込んでいましたが、荒川放水路とぶつかる小菅付近から荒川と並行するように掘られた水路を南東へ流れることになりました。中川は蛇行を繰り返しながら東京湾へと流れていきましたが、放水路とぶつかる上平井付近で綾瀬川の新水路と合流して南東へ流れ、そのまま荒川と並行して東京湾へ出るようになりました。寸断された下流部はどうなったのでしょうか。綾瀬川は荒川放水路と隅田川を結ぶ旧綾瀬川（400m）として残り、中川の一部は放水路の右岸に取り残され、流れのない江東内部河川のひとつ旧中川となっています。地図を見ると、どちらもかつて、つながっていたことがわかるでしょう。

